

松山幸生先生講述

全33回--5

2021年12月

写者

小原靖夫

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第5回 人が聖なるものとなるために

### 第2章⑩節から⑱節 救いの創始者(2)

- ⑩というのは、多くの子らを栄光へと導くために、  
彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、  
万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです。
- ⑪事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、  
すべて一つの源から出ているのです。
- それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、
- ⑫「わたしは、あなたの名を わたしの兄弟たちに知らせ、  
集会の中であなたを賛美します」と言い、
- ⑬また、「わたしは神に信頼します」と言い、更にまた、  
「ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」と言われます。
- ⑭ところで、子らは血と肉を備えているので、  
イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。
- それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし
- ⑮死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。
- ⑯確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。
- ⑰それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、  
民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。
- ⑱事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、  
試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。

138

今日は10節から18節までをご一緒に味わってみたいと思います。

この「救いの創始者」という見出しで書かれている部分の前半、5節から9節まででは  
イエス・キリストの十字架と復活の出来事にふれて、すべての人のために死んでくださった  
イエスについて述べてきたわけですが、今日はこの後半の部分についての学びになるわ  
けです。

「なぜイエスが苦しみを受けて死ななければならなかったのか」を、この10節以下  
では述べています。パウロが書いたローマの信徒への手紙の11章36節に、「すべてのも  
のは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にあり  
ますように」と書いてあります。

ここで神の創造の目的は「これは本来、神のみに帰されるはずの自由と栄光に向かって、すべての人々を導くことだった」と語りかけられているのです。そして「その目的を遂行するためには『救いの創始者』であるイエスの苦しみがなければならなかったのだ」と10節では述べているわけです。

第10節、

「というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方に、ふさわしいことであったからです」

大変丁寧な表現でこの事がらを述べていますが、十字架の苦しみによる救い、その事柄の達成は神の御旨から出たことです。そしてイエスは多くの苦しみを通してそれを完成された御方なのです。

この中に書かれている事柄をもう少し丁寧に見てゆきたいと思います。

この「完成した」とか「全うした」という、あるいは「完全な者とされた」と表現されていくとき、一体「何を」言っているのかに問題があるわけです。

(何を完成されたのか)

イエスは初めから清く、悪も汚れもなく、罪から離れている完全な存在であったという証言は聖書の中にたくさんあります。例えば、コリントの信徒への第二の手紙の5章21節\*<sub>1</sub>とかペテロ第一の手紙の2章22節\*<sub>2</sub>、ヨハネ第一の手紙の3章5節\*<sub>3</sub>などではそうした事柄を非常にはっきりとした形で証言しています。ですからここで「完全なものになった」という言葉は「イエスが完全になった」ということではないわけです。

\*<sub>1</sub> 罪と何のかかわりもない方を、神は私たちのために罪となさいました。私たちはその方によって神の義を得ることができたのです。

\*<sub>2</sub> 「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」

\*<sub>3</sub> あなた方も知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません。

一体「何が完全なものになったのか、何が完成されたのか」が当然問題にされて来るわけで、文脈からお読みいただければすぐわかるように、神は、このイエスの受苦\*、そして十字架の死を通して「救いの業を完成なされた」と語っているのです。

「救いの創始者は数々の苦しみを通して、その救いを完全なものとなされたのです」と書かれていますから、そのように考えていただいてよいと思います。

(\*受苦・唾や鞭や茨の冠等の王の装い、罵倒などに代表される受難よりも、それ以上に愛の対極にある「無知、無理解、無感動」というお苦しみを表しているのではと思うのです。黙示録にある「熱くもなく冷たくもなく、ぬるいものをわたしは吐き出す」と言われた主のお苦しみ。ゲッセマネでのお苦しみの祈りです。森容子先生のご指導です)

具体的に「イエスは何を完成なされたのか、何を完全なものとして全うされたのか」については次の三つを含めて色々なことが考えられます。

一つは「父なる神の召しに従って完成された、あるいは完全に行なった。死に至るま

で従順であり、その従順を通して神御自身に服従するその生き方を完成なされた」ということです。<sup>140</sup>

私たちは神の御前に出る時には従順になり、その御旨に従うわけですが、その生涯を神に完全に従い通すことは非常に困難です。そのような中でイエスはそれを完成してくださったと、ここまでは「神とイエスとの関係」が述べられているわけです。

次に、「イエスは私たち人間と同じようになることで、人間の罪の贖いを完成してくださった」このこと

は非常に私たちにとっては大切な問題なのです。「イエスが受肉なされた」、神の子としてこの世においでになられた、人となられた、ということは救いのためには不可欠な条件でした。言い換えれば、イエスは「まったく欠けのない人間そのもの」にならなければ、人間を救うことができにならなかったという部分であって、イエスは受苦を通し、そして十字架の死を通して、完全に私たち人間の罪の贖いとなられたということです。ここでの一つの完成者、完全な者という言葉にはその事柄が含まれていると考えられます。

それから最後に、「イエスは完全にこの世に対して勝利をおさめられた」、生と死とのすべてのプロセスを完全に歩み通されることにより、「栄光への道に導く先達」となってくださった、御父の御心をどこも省略なさることなく、きちんとそのすべてを歩み通され、救いの道をお示しになった、そのように受け止められるのがこの10節の言葉ではないかと思えます。

更にこの10節のお言葉に含意されるのは、神は、私たち一人一人をお救いくださるには、御子イエスの十字架の受難を通して完成なさることが最も良いとお考えになり、イエスもその道を歩み通されたのだと述べていることです。

#### 第11節、

「事実、人を聖なる者となさる方も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで」

救いの対象であった人間

大変むずかしい表現で「聖」という清めの問題が取り上げられているのです。

「救いの対象であった人間」、(つまり、イエスが受肉し、苦難をお受けになり、そしてその後さらに復活の力によって完全に救い上げてくださった、その「救いの対象としての人間」)は、本来聖なるお方である神にその源を置いています。

言い換えれば、神によって創られた存在である、神の意志から生まれた存在である、そういう意味で「人間は本質的に聖なるものだ」という考え方がこのヘブライ人への手紙の基調にはあります。

結局、この手紙そのものを私たちが読んで行く時に、「人間」をどう捉えるのか、それから「救い」をどう受け止めるのか、「贖い」をどう考えるのかということ非常にはっきりした形で確認していきませんと、曖昧な部分、私たちが適当に良しとしてしまう部分が

できてしまうのではないかと思います。（既知のこととして読み流してしまう危険性があることに警告をされている）

「人間は聖なる者でなければならない」ということは、旧約聖書のレビ記十九章二節に「あなたたちは聖なるものとなりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である…」という言葉があります。<sup>142</sup>

神が聖であるから、あなたがたも聖なるものでなければなりませんと言っているわけです。つまり「聖なる者となるということはある意味では、神と一体化されるために、あるいは神の所有であり切るために、神の属性を自分の属性として持っていなければならない」という主張であるわけです。（ありきるであって、なりきるではない）  
しかし現実には、私たちは聖なる者からは非常にほど遠い存在なのです。

「清め」について

そこでユダヤの祭司は、モーセの律法に規定された様々の状況に照らして清めの細則を作り上げ(祭司は自分が清くすることはできませんから)「こういう方法、こんな形で清くすることができるのです」ということで、「律法」を細かく定めています。それに従って祭司が人々への清めのわざを行なっているのです。

例えば、燔祭であるとか、罪祭であるとかで、犠牲を献げる、あるいは清めの行事が贖罪日に行われる、そのような方法を通して人間が清くなるための様々なものを作り上げてきました。

だが、「どんな方法を取ろうと、そのことが人を清くするわけではありません。それは清くしていただきたいと神に願う方法であって、そうしたから、私が清くなったのだということではありません」これはとっても大切な問題だと思うのです。

人間は何を行なっても人を清くすることはできません。私たちがどんなに謙虚になり、どんなに忠実に神に仕えて人々に宣教したとしても、人を救うのは私たちではなく神なのだというあたりと、ある意味では似ていますけれども、そういう「自らが聖となる」ということは「私たちは聖ではないので、聖とされなければならない存在なのだ」ということをはっきり証明し続けること、これがこの箇所で行われている大切なことなのです。ですから「清さ」という事柄を「神から与えられたもの、神によって保証されなければ、それは決して自分のものにはならない」ということに結び付けてゆかなければいけないと思います。

この「清さ」の問題を実は13節までの間に、このヘブライ人への手紙の中では、「詩編」であるとか「預言者の言葉」を引証しながら「神の御手に委ねること、もっと別な言い方をすれば、キリストと一つの体になることによって初めて可能になる」ということを、繰り返し、繰り返し述べていると言って良いと思います。<sup>144</sup>

私たちが清くない存在であるにもかかわらず、清いものとされるためには、私たちの「救

いの創始者」であるお方は、人々から被る苦しみと十字架の死を通して、光と闇とを指し示し「栄光に至るべき道」を備えてくださらなければならなかった。そしてそのような道を開いてくださっただけでなく、現在も神の御許に至る道に導いてくださる、そして共に私たちの中であって、その道を歩んでゆくことができるように神の知恵を与え、神の御前に生きる者に相応しい者になるように清め続けていてくださるということをしっかり確認をしておかなければならないのだらうと思います。（御子の御受難は、父なる神の御心であった）

「教会で行われる清めのわざ」

聖なる礼典と呼ばれているものの中で「バプテスマ＝洗礼」がありますが、これは、生涯一回限りのものです。即ち、「キリストの贖いによって、私は清められることを望みます、そのキリストのなされた業が私を清めてくださっていることを信じます」という公の信仰です。

そして「聖餐」は、その信仰に立って今、キリストの十字架と復活の生命を共に生きていますということを確認し続ける、「今、主と共に歩んでいます」ということを確認するため教会の礼典として定められているわけです。

「聖餐式」はキリストの死と復活を記念する典礼である、あるいは十字架と贖いのわざを覚える典礼であると言われていますが、正に、そのことによって、このキリストと一つになることができるという経験を「あの聖餐」という出来事の中で見るのです。

別な言い方をすれば、聖餐にあずかる方法を用いて「清め」を確認してゆく、神によって聖なるものとされていることを、洗礼後に何度も何度も確認してゆくことが重要な問題となって来ると言ってもよいと思います。

「そういう清めのわざ」が、これまでユダヤ教で行われてきた、いわゆる「みたまによる清め」とは異なり「イエス・キリストとの結合によって生まれて来る清め」と理解する課題がヘブライ人への手紙では大変強く主張されています。

つまり、これはユダヤ人たちがの律法による清め、（自分の行為によって清めが可能になるのだという錯覚の中に落ち込んでいる状態）の中で行われることではなく、そうではなく、その清めをあなたがたの中で確かなものにしてゆくのは、イエス・キリスト御自身でしかないのだ。そのために、キリストは「的外れになっている状況（人の罪）」の中で、祈りに祈られ苦しまれた末に、その的外れの状態から正しい方向に立ち返ることができるようにと、十字架の苦難を受けられ、様々な人の罪を負う苦しみを通して私たちと一つになることを御自身が担われたがゆえに、今、キリストの清めにあずかることがゆるされているのです。それゆえ「聖なる者を目指す」とされたので、イエスは私たちを『兄弟』と呼んでくださっています」と11節では語るのです。

第12節、

「『わたしは、あなたの名を、わたしの兄弟たちに知らせ、集会の中であなたを賛美します』と言い」

「キリストが私たちが兄弟と呼んでいる」と言った後で、その事柄が決して頭の中で考えられた論理ではなく、神が私たちにお約束くださった事柄なのだとすることを立証するために、この12節は詩編の第22篇23節の御言葉を引証しているのです。

「わたしは兄弟たちに御名を語り伝え、集会の中であなたを賛美します」

この詩編の冒頭の部分は、イエスが十字架上で「我が神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と神に祈り叫ばれているのと同じフレーズですが、ダビデが苦難に遭い、そこから救われた際には、神を讃美するに至った詩編として、ユダヤ人たちの間では大変大切に謳われ続けて来た歌です。

ですから、その歌の中では「信仰者に対する迫害が押し迫っても、なお集会において神の御名を讃美し励ましていくのだ」と歌われているわけです。

この「あなたの名を、わたしの兄弟たちに知らせ」と謳う中の「兄弟たち」というのは罪に染んだ人々、ないしは自分たちに対して敵意を抱いている人々をも含めて兄弟という言葉で呼んでいます。<sup>146</sup>

その「兄弟」と呼ぶ時、一番大事なものは何かと言うと、どうしてそんな人々が兄弟になり得るのかということです。「あなたの敵を愛しなさい」とか「あなたを責める者のために祈りなさい」とか「迫害する者たちを祝福しなさい」とか聖書が語る理由は一体何なのでしょう。

それは、彼らも神の御手によって創られ、キリストの贖いによって彼らもまた、既に清められた存在なのだという信仰がその背後にはあるからなのです。この私を清めてくださったお方は、私に敵対する彼らをもお清めになったのだ。即ち、キリストの十字架の贖いは不完全ではなく完全だった。それに及ばない人は誰一人いない。その恵みはすべての人々に向かって有効に働いているのだと、確認をしてゆこうという思いがここにはあるのだと思います。

「信じた者は救われます」これは事実なのです。救いとして受け止めた者は、その救いが自分のものになりますが、「信じない者は救われません」と言い切ってしまった時、私たちは下手をすると、彼らはもはや私たちとは別な社会に生きる、別な存在なのだというように考えてしまうことが多いわけです。少なくとも彼らは未だキリストの贖いと救いが知らされていない、故に、受け止めることがゆるされていない存在なので、パウロ流に言うならば「聴いていないから悟らないのだ、語られていないから聴いてはいないのだ、伝える者がいないから、彼らのところには伝わっていないのだ」。その欠けはキリストの贖いによる欠けではなく、私たちが神から委ねられた「宣教の使命に対する欠落」から起こって来る欠けなのだと、ローマの信徒に宛てた手紙の中で語っていることなのです。<sup>147</sup>

このヘブライ人への手紙でも「キリストの贖いは一回限りで完全に行われた、どんな人々に対してもそれは確立されているものなのだ」と語ります。

しかし、それが本当にすべての人々のものにされていない以上、「異教社会で、異邦人の

中で、あるいは自分たちに対して敵対する者たちのいる集会の中で、主の名を讃美し続けようではないか、主の恵みを謳い続けようではないか、主の福音を証しし続けようではないか」というような形でこの詩編22編を理解し、ここに引証しているのだと考えてよいと思います。

ですから読者は少なくとも、ヘブル人への手紙の中で詩編22編を引証した著者は、いわゆるユダヤ人たちが、読んでいる読み方とは随分違った読み方をしていることに気がつかれると思います」それは前にも申しましたように、あえて七十人訳の聖書の言葉を持って来て書いたり、色々なことをしながら「私たちが信じているのは、旧約時代に証しされた神の真実だけれども、自分たちに都合良く解釈してしまって、神の御心通りには解釈して来なかったので、今、私たちはキリストの恵みと憐れみによって、それを正しく受け止め、解釈し直してゆこうではないか」という呼びかけが、この中から聞こえて来るような形で12節では語られているのです。<sup>148</sup>

### 第13節、

「また、『わたしは神に信頼します』と言い、更にまた、『ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます』と言われます」

この「わたしは神に信頼します」という言葉は、イザヤ書の8章17節の御言葉です。また同じようにサムエル記下の22章3節にも出てきますが、そういうところに登場して来る重要な御言葉です。

ダビデの歌を「神に対する信頼」として受け止めた著者は、今度はイザヤの約束の成就を「神に向かって待ち望む信頼」としました。そしてそれを二つ合わせて、イエスに対して信仰告白しているのです。

「神は、私たちが贖ってくださり、集会の中で讃美出来る力を与えてくださった、と同時に、神は私たちに対してかけがえのない信頼を与えてくださった。だからイエス・キリストに対して讃美を献げ、イエスを信じているという信仰において、これを生かしていけば良いのだ」と語っているわけです。

また、「ここに、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らがいます」というこの言葉はイザヤ書8章18節の御言葉です。

こういう形で神が私たち一人一人に対して豊かな恵みをもって臨み、確かな愛をもって応えてくださったということを、このヘブライ人への手紙の著者の立場から表現し直して見ますと「イエスは私たちと一つになることを通し「聖別」され聖化してくださった。このように私たちが清めてくださる降臨のイエス・キリストは神から生まれ、清められた私共もまた御霊の力によって神から新たに生まれた存在なので、すべてその源は一つである。清いお方は神御自身だけなのだとここで語られている。そして清めを行なわれたキリストと清めにあずかる私たちは皆、神の御旨によってこの世で出会い、この世で共に歩み、こ

の世で関わりを持つことが許されている。救う者と救われる者との間に、そういう意味では本質的な、基本的な、根本的な一致が既にあるのだ」というような主張があります。

「だからキリストは、私たちが兄弟とお呼びになることを恥とはなさらなかったのだ、罪だらけで愚かで不誠実な私たちがキリストは清いものとしてくださり、兄弟と呼んでくださって、神の清さにあずかることのできる者として引き上げてくださっているのだ」とそのように言うわけです。このキリストが私たちが贖ってくださる、更にキリストが豊かな恵みをもって導いてくださるというこの部分は、とても大切な部分だろうと思います。

12節のお言葉についてももう少し申しあげますと、教会の中心にイエスは”今”お立ちくださっており、メシアであるキリストが行われる活動について、この部分では非常にはっきりした形でイエスは御自分のお働きをお示ししてくださっています。

即ち、神が私たち一人一人に対して与えてくださった深い恵みは、このイエスを通して私たちの中に訪れているので、その御方を仰ぐ時に、讚美せずにはいられないところにまで高められていくのだという一つの思いを、12節で詩編を引証しながら、この手紙の著者は訴えているのだらうと思います。<sup>150</sup>

また、13節の前半のところ、イザヤが民の不信の中にあって、自らは神に徹底的に寄り頼んだことを伝えている箇所を通し、キリストが死に至る苦難の生涯を通して、ただ神だけに信頼なされたという姿をもう一度浮き彫りにしながら指し示しているのだ、といっても良いだらうと思うのです。

後半の「ここにわたしと云々……」という部分についても「キリストの臨在と共生（神が私どもの中に来てくださったこと）」が非常に明確な姿で述べられていると思います。しかもこの箇所をあえてヘブライ人への手紙の著者が置いた理由は、この手紙を書き送っている時代は、ご承知のように古代ギリシャ文明の発展していた時代ですから、グレコ・ローマンの社会の中では彼らは神々の存在をいろいろな意味で信じていたからです。

ギリシャ神話にしてもローマ神話にしても、沢山の神が出て来ます。神が存在するという事は彼らは認めているのです。ところが彼らが描いている神というのは、その神話を読んでいただくとわかるのですが、この世の世界空間の中にはいないのです。それを超えた外側に住んでいる神なのです。その神々は…あるいは日本の神々もそうなのかもしれませんが、人間に関しては全く関心がないのです。その神は非常に自己充足的な神で、自分だけが満足な力を持ち、満足な働きができればそれでいいという神なのです。<sup>151-152</sup>

それ故、この筆者は「聖書の神はそういう神とは根本的に違うのだ」ということをはっきり打ち出そうとしています。言い換えれば、異教文化の神々の概念というものにある程度毒され、束縛されてしまっている人々に対して「私たちの神はそういう神とは違うの

です」とあえて主張したいと思い「わたしの子」とか「わたしの兄弟」とかという言葉



用いて、気高い神との親密な特別な関係を明確にいい表わそうとしているのだと思います。

キリストの受肉なしには救いはない

即ち「キリスト教の神イエス・キリストは人間と同一の肉体をとられ苦難の生涯を送られた故に、人間の苦悩を察し、助け、これを救い、励まし、これを導いてくださることのできる先導者になられたのだ」というようにここで言っているわけです。

御子なる神は、私たちの置かれている状況に御自分をきちんと当てはめるため、イエスという人間の姿になられた。しかも完全な人間イエス・キリストになられた。そのことなしに救いはないのだと主張します。

結局「キリストの受肉」という事柄、即ち、私たち人間と全く同じものとして神がこの地上を歩まれることが、その捕らわれている一切の拘束から私たち解放するためにはどうしても不可欠な方法だったのです。<sup>152</sup>

外側から「もうあなたがたは自由です」と宣言することではなく、「私たちと一緒に生き、がんじがらめになっている鎖を一つ一つ断ち切ってくださいることによって、神は私たちを自由なものにしてくださった」という発想をここで非常に強く述べているのです。

ですから「臨在」「来臨」「受肉」というような言葉が聖書の中で語られる時に、それは決して概念的だとか抽象的だとか神学的だとかいうような言葉ではなく、正に私と共に生きるため、私の隣に、私と同じような姿で存在してくださる神、それがキリストなのだ、それがメシアなのだという受け止め方を、このヘブライ人への手紙の中では大変鋭く繰り返し繰り返し私たちに向かってぶっつけているのです。

第14節前半、

「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました」

ここでいう「子ら」というのは私共です。（私共は血と肉を備えているので。）

これもすごく重要な言葉です。「血と肉を備えているということは、土に帰るべき人間性そのもの」を指しています。

即ち、私たちはどんなに靈的に完成に近づいた存在になったとしても、血と肉を離れては存在しな

いのです。言い換えるならば、私たちは土から採られ、土によって成り、土に帰るべき存在でしかない「被造物」だということを語っているわけですが、イエスは被造物ではなく、土に帰られることもありません。けれども神は、イエスにも同様に人間と同様の血と肉を備えられました。<sup>153</sup>

これが実はあのインカルナティオの秘義であり、「キリストが『受肉』なされたこと」なのだ。イエスは神の子としてクリスマスの日にこの世にお生まれになった。その事柄の本当の意味は、「私たちと同じ肉を持った存在としてこの地上に来られるためであった。、その生涯を人と共に歩んでくださるためであった。しかも、人と同様に『死にゆくべき

者』としてこの世にお出でくださった」というその事柄が、この箇所では先ず訴えられるわけです。

#### 第14節後半、15節

「それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした」

「解放の福音」

ある聖書注解者がこの14節後半から18節までの箇所は正に「解放の福音」が告げられているのだと言っているのです。「解放」という言葉、この言葉はキリスト教の福音を考える時に一つのキーワードとして捉えておかなければならない大変大事な言葉なのだなど私も思うのです。

私の教会では礼拝の終わりに讃美歌二篇の10番を歌います。「解放の福音」を私たちはいつもこの世にもっていきましょうという讃美を皆でするわけですが、正に、キリストが私たちに説き明かし与えてくださった「福音」は、あらゆる束縛から解放してくださる、自由へと招いてくださる、そういう福音なのだという理解を、私たちの中にきちんと基礎づけていくことは大事なのだらうと思ひ、そのようにしているのです。<sup>154</sup>

黒人の神学者であったJ・H・コーウという人がこの自由とか解放とかいう事柄について語った言葉に大変興味深いフレーズがあるのです。

「黒人が黒人であるといわれている黒人性というのは、実は非存在、非人間であるということを行っているに他ならない。そしてこのような非人間的な取り扱いの下で、どうしたら我々は生き残ることができるだろうか。奴隷は人間ではあり得ない。自由は人間の本質に属する。すべての人間が自由であるまでは誰一人自由ではない。抑圧からの解放こそが福音の本質なのだ」と語っているのです。

彼は「自分たちが黒人として差別され、抑圧されていることは、私たちの不利益、私たちの敗北ではなく、どの人間も、言い換えるなら、白人も含めて、彼らが不自由になっていることなのだ。もしも私たちの交わりの中に自由でない人間が一人でもいたならば、その交わり全体は自由ではないのだ。だから彼らの自由が保障されるために、私たちはキリストに在って自由になろうではないか」という発想をもって語っていくのです。

「誰かから拘束されているのではなく、自分たちがその不自由にあることを理由に、自分たちを不自由にしてやしないか。そしてもし、あなたがたがその不自由さを肯定し、受け入れて生きていこうとするならば、あなたがたはすべての人を不自由に行っているのだ」  
・ ・ ・すごい理論だと思うのですけれど ・ ・ ・ そういう理論を語っているわけなのです。

「罪からの解放」

今日の解放という問題は、正にそういう事柄にかかって来るのではないかと思います。一体ここで解放と言った時に、どういうことから解放されると言っているのかという問題も出て来るのですけれども、先ず明確なのは「罪からの解放」です。

罪からの解放は、別な言い方をすれば、「神が定めてくださったように生きられない私た

ちの不自由さ、それが罪なのだ、だから神の言葉に従って生きられるように、変えられていくことが『罪からの解放』なのだ」と語るわけです。

これは基本的には、「何を望んで生きているのか」という問題と深く関わって来るのです。私の幸せとか、私の何とか…で生き続ける限り、束縛され拘束された状況でしか生きられません。そして私がそのようなものを追求しながら生きていることは、世界人類を不自由にしていることなのだ、ということに気がつかなければいけない。

「キリストは私たちが”既”に自由にしてくださっている。だからどんな中傷も、攻撃も、危険も、災害も私たちの本質を損ねないことを知って生きる。それが結局、罪から解放されることなのだ」と言うわけです。

#### 「死の恐怖から解放

また、私たちが拘束しているものの一つに死の恐怖があります。そして「死の恐怖から解放されてゆくこと、それが自由になることなのです」。一体死の恐怖とはどういうものかと考えると、先ず非常に単純に考えて見れば、「肉体の死」の問題があります。私たちはいつか死んでしまわなければならない。死ぬことは経験したことがないから何となく怖い。嫌だという考えがあるわけです。

ところがR.M リルケという人は、このような「肉体の死」は「小さな死」だ、そして自分自身の中にある「大きな死」にもっと目を向けていかなければいけないと言っているのです。

その大きな死とは一体何か。それは結局私たちが「霊的な死に至っていること」なのです。それには神なしに生きられるように考えてしまっていることを本当に恐れなければならないと言っているのです。

アモスは、旧約時代の人々が、自分たちが造った神によって救われ、生きようと考えていた、そういう状況にある人々に向かって「あなた方は神に会う準備をなさい」と非常に強く訴えたのです。神に会う備えをなさい。神はあなた方が造り上げるのではなく御自身が私たちに近づいてくださるのであって、神は近づいていらっしゃる時には基準を持って。基準に合わないものはそこからゲヘナの火に投げ込まれてしまう。だから神に会えるような自分になりなさいと訴えるわけです。

アモスは勿論、イエス・キリストと出会っていませんから、贖ってくださった御方を知りません。「あなたがたは神の御前に律法に従うて清さを生きなさい、神を求め、神のみに従いなさい」と盛んに訴えますが、その訴えを聞いて何か空々しく聞こえるという状態であるとすれば、私たちの霊性は全く死んでいるということができると思います。<sup>157</sup>

この「肉体の死」と「霊的な死」を越えて、最後に主の裁き、一人一人が「神の裁き」によって経験する「永遠の生命」と「永遠の死」があるわけで、永遠の死に対して私たちはやはり恐れをもっています。

そういうあらゆる死に対して、「イエスは死んでよみがえられた」という真理によって、死はもはや私たちに対する効力を失った。パウロ流に言えば、「死よ、お前の刺はどこにあるのか、あなたの刺はどこにあるのか。どんなに死が私たちに脅かしても、刺し貫く力

を持ってはいないではないか、キリスト・イエスの贖いと復活の力が固く覆っているの  
で、あなたの刺はもはや私たちには何の痛痒も感じさせなくなっているではないか」とい  
う「死を乗り越えた自由」が「二番目の自由」ということで考えられ、「罪からの解放」  
に続く「死からの解放」というものが訴えられているといってもよいのではないでしょ  
うか。

ここでは「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるため  
でし」と書いてあります。あるいは「死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によっ  
て滅ぼし、云々」とある通りです。<sup>158</sup>

「サタンからの解放」

次は「サタンからの解放」ですね。悪魔からの解放、今、私たちはサタン=悪魔なんて  
という言葉を使うと何となく滑稽だなと思いますが、この時代にはサタンが非常に現実性  
をもって受け止められていたのです。例えばサタン=悪魔というものは死をつかさど  
っている存在として描かれ、認識されていました。肉体を滅ぼす力、それがサタンなの  
だ、というように考えられていたので、パウロの説明によると「自分たちが神に従うこ  
とができず、神の恵みを喜ぶことができないような生き方をさせる力、それがサタンな  
だ」というように理解していたようです。

主は、そういうサタンから私たちを自由にしてくださるのです。そして私たちは「死」を  
乗り越えて自由になれるが、「その自由を他の人々に与える力として、自分の命を提供  
する」などということとはできないのです。

例えばアウシュヴィッツで愛に生きたという「コルベ神父」は、人々の身代わりになって  
死ぬことはできたのですが、その結果、恩恵を受けた皆が死ななくなったかという  
のではない。やはり彼らは死の恐怖に脅え続けるわけです。今は死から逃れたけれど  
も、やがてまた私にもあの死が来るのではないか、彼らを一時は救うことはできても  
、永遠の死、永遠の滅びから解放する力は私たちにはないのです。

また、どんなに自分を清めてみても、調べてみても、多くの人々の救いのために自分の身  
を引き渡そ

うとも、すべての人々を死の恐怖から掬い取ることはできない。それができるのは「イエ  
ス・キリスト」だけなのです。<sup>159</sup>

この間、私共の教会学校の生徒の一人が大変面白い質問をしたのです。

「先生、どうしてイエスさまは十字架で死んでから三日目でないとよみがえらなかった  
のですか。イエスさまだったら十字架の上で死んですぐによみがえられたはずなのに、  
どうしてよみがえられなかったのですか」。

私は彼の質問に対して「ウン、君はなかなか立派ないい質問をしてくれた。そういう質問  
を待っていたんだ、先生は…」と言いながら彼に話したのです。

「イエスさまが十字架にかかってすぐよみがえっちゃったら、陰府(よみ)にいる人はどう  
なるの。私たちの聖書は、イエスさまは十字架におかかりになってお墓の中に三日間らっ

しゃった、別な言い方をすれば陰府におくだりになったと書いてある。陰府に人間は行くことはできない。だからどんなに私たちが陰府にいる人々の救いを求めても、私たちは彼らに直接関わることはできない。イエスさまが十字架の上で死なれて陰府に行ってください、私たちが出来ないそのことをイエスさまがしてください、陰府にいる人々にイエスさまの恵みを伝えてください、神様を信じることができるようなチャンスを与えてくださった。それから、お帰りになるためには三日間必要だったんだよ」という話をしたので。

イエスが十字架の上で死んで復活なされたということは、今、生きている私の問題だけではなく、すべての人類をお救いになるために欠かすことのできない業を、そこで押し進められたことであるわけです。その意味で、イエスが陰府にまでも救いの恵みを届けてくださった、言い換えれば、死の恐怖の中でがんじがらめになって死んでしまった人々にも「死はもはや何の力もなくなったのだ」ということをはっきりお伝えください、お示しください。するために陰府に行かれたということ、私たちは真摯に受け止めておく必要があるだろうと思うわけです。このことにより、死によって人々を脅かし続けているサタンの力は無力になっているのです。そのことがここでは言われています。

(信仰とは理屈抜きに「神が望んでおられる事柄を確認し、私たちに見えないその事実を確信することです」との御言葉を体感することだと思いました。「単純に受け止める」との松山幸生先生のお声を畏れつつ有難く聴いております。)

その「罪」から、「死」から、「サタン」から解放してくださったイエスは、その時だけではなく、今日もなお私たちとともにおられて、一人一人に救いを具体的な形で示し与えてくださっていることが、しっかり受け止められて言ってよいのではないのでしょうか。

## 第16節、

「確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです」

これはすごく面白い言葉なんです。イエスは天使たちをお助けにならなかった。言い換えれば、神に仕えるべき存在として、御心を伝えるために神に召されている天使を、イエスは助ける必要はなかった。イエスはむしろ御心を伝えられた人々が、それをしっかりと受け止められるよう必要があったのでしょう。それ故、イエスは人間になられたのです。

その時代には大変おかしな神学として「イエスは神人(しんじん)と呼ばれる存在で、人間でもなく、神でもなく、その中間的な存在だった」という考えもありました。それはイエスが天使と同じ「マリオン」だということであるわけです。162 (マリオンは、神と人との仲介者。マリアの変形)

だが、「イエスはそのような神人ではなく、『全き人』であった」。しかも『全き神』であった」ということを、ヘブライ人への手紙の著者は、ここで少なくとも表明していると思います。(ヘブライ人への手紙の著者と松山先生とが二重写しのように浮かび上がってくる思いがします)

## 第17節

「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです」

「受肉の秘儀」

またここで、受肉の真理について語っています。と同時にこの手紙の中で初めて、「大祭司」という言葉が出て来るわけです。大祭司という言葉で何を言おうとしているのかというと、「当時のユダヤ教の社会では、この大祭司というのは年に一回大贖罪の日に雄牛の血を自分の家族のために、雄山羊の血をイスラエルの民のために至聖所の祭壇に注いで贖罪の献げ物とする。そしてすべてのものを聖とする贖いを、そこで人々に与える祈りの儀式を行う」そういう責任があったことをレビ記の16章で記しているのです。

しかし大祭司は贖いを祈り願うことはできるが、自分では贖えない。ところがイエスは真の大祭司となって、すべてのイスラエル、即ち、神を信じる者、私たち教会のために、御自分でその贖いを完成して下さるお方なのだと言っているわけです。

後に学びますヘブライ人への手紙の10章1節のところに「律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちを完全な者にすることはできません」と書いてあるのです。大祭司がどんなにしも完全な者にすることはできないのです。けれどもイエスは、この世に来られて、そのことを完全にしてくださった、ということが大変丁寧に書いていますから、その時にこの部分については学ぶことにいたします。

イエスはそのようにして私たちに救ってくださり、贖ってくださった。そのためには大祭司として神の御前に立つことが必要であった、大祭司は人間の中から選ばれるので、イエスは人間として私たちの中においでにならなければならなかった、それが、「受肉の秘義」なのです。

この第2章の後半部分はイエスが私たちと同じになられた「同一性」「共生」「臨在」の姿を徹底的に打ち出すために「受肉」の問題も非常に大切に扱っています。そのように考えながら味わうと、私たちは通り一遍に読んで、難しいことをしち面倒くさく書いてあると感じることとは違った形で、新鮮に受け止めることができるのではないかと思います。

## 第18節

「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです」

同じ立場に身を置くことによって、初めてそこにある人々を励まし、助け、慰め、力づけ救う道が開かれてゆくのだ。「一緒にいること」(聖霊は百パーセント可能ですが、肉をとられていたイエス様は常時は不可能でした)が救いのためには必要な条件なのです。だからイエスは私たちと同じ地上に同じように生きてくださった。貧しさも、厳しさも経験なさる、裏切りも深い愛も経験なさる。その一つ一つの人間の心の動きや生活の在りようを共に生きて味わってくださったからこそ、私たちに何が必要であるかがよくわかって、必要なものを絶えず送り続けて下さることがおできになるのです。

それが私たちの救いには欠かすことのできない条件だったので、「神はイエスをこの世に送って人とならしめ、苦難の道を歩ましめられたのです」と述べているわけです。そしてそれがあったからこそ、私たちは今どんな苦難に出会おうとも、イエスが既にそれを乗り越えていらっしゃるという、その「先達の姿」を見ることによって励まされ、力づけられ、信仰から信仰への歩みを進むことがゆるされているのだという説明をここでしているのです。

「救いの創始者」は「お始めになると同時にそれを担われるお方」であり、「救いを私たちの中にお始めになったお方」は、「今もそのわざを継続していらっしゃるお方」でそれが「主が共にいてくださる」ということなのです。そして共にいましたもうイエス・キリストとの出会いの確認が「主の日の礼拝」であり「神の言葉による贖い」であり、更に「聖餐によるキリストとの出会いの確信」である、とそのようなことをもう一度確かめておくことが大切なのではないかと思います。(一九九六年五月十一日)

写者あとがき

松山幸生先生のお話に目が覚める思いで写を進めております。先生の熱心は聴き手になんとしてでも伝えたいとの熱情に溢れています。又、当時の歴史的背景の説明、旧約聖書の解説と現代における実存的な関わり等の迫力に満ちております。信仰薄く、知識にも疎い「幼子」故に、この大それたことを始めました。そして「誰かに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです」との著者のお叱りに只々頭をたれ、懺悔しております。

その空白を噛みくだいて解説してくださる森容子先生の渾身のご指導により、更に身震いする刻々でございます。幸いに健康が支えられ、この修業を進められ、天国に近づきつつあることを覚え感謝して日々を過ごしております。一日も早く完成したいとの焦りに似た意欲がありますが、自分の牛歩を受け容れております。ヘブライ人への手紙の宛先は、間違いなく「私」であると実感しております。2021/10/18

文中に引用しましたヘブライ人への手紙第11章1節、信仰とは

「神が望んでおられる事柄を確認し、私たちに見えないその事実を確信することです」はギリシャ語原典を森先生からご教示いただきました。